

30. 年末出荷用カンキツ「広島果研 12 号」を育成

1. 背景とねらい

年内出荷用のカンキツ類は、温州ミカンが大半を占め、市場価格の低迷が顕著である。このため、年内出荷が可能で、かつ、外観・食味が温州ミカンと異なる新しいカンキツ類に対する要望が強い。そこで、大果（200g 以上）で糖度が高く（11 度以上）、12 月に酸度が 1%前後となり、年内出荷が可能なカンキツ新品種の育成を行う。

2. 技術の内容

- 1) 「広島果研 12 号」は、種子親「清見」に花粉親「サザンレッド」を交配し、育成した。
- 2) 成熟期は 12 月初旬から 12 月中旬で、11 月中旬に完全着色となる（写真 1）。
- 3) 果実の大きさは、成熟期が同時期の「ミホコール」や「ありあけ」に比べて大きく、果実重は 237g～248g で、横径は 81～82mm である（表 1）。
- 4) 果形指数は、「ミホコール」に比べて低く腰高であるが、「ありあけ」に比べて扁平であり、扁球の果実である（表 1）。
- 5) 収穫時の果実糖度は 11.6～11.7、酸度は 1.08～1.13%で、年によって多少の変動はあるものの「ミホコール」と「ありあけ」に比べて酸度はやや高いが、糖度は同等以上で食味は良好である（表 1）。
- 6) 果皮は濃橙色で、果汁は多く、じょうのう膜の硬さは中程度と薄く、種子数が極めて少ない（表 2）。
- 7) 以上の結果より、「広島果研 12 号」は大果で糖度が高く、12 月に酸度が 1%前後となり、種がない年内出荷が可能なカンキツ新品種として有望である。

3. 今後の計画

- 1) 品種登録に向けて準備を行う。
- 2) 「広島果研 12 号」の現地適応性を調査する必要がある。

（果樹研究部）

4. 具体的データ

表1 年内出荷用交雑品種「広島果研12号」の果実品質

品 種	年次 ^{X)}	果実重 (g)	横径 (mm)	縦径 (mm)	果形指数 ^{Y)}	着色歩合 ^{Z)}	糖度 (° Brix)	酸度 (wt, %)
広島果研12号	2000. 12. 1	248	82.0	75.5	108.6	10	11.7	1.13
	2001. 12. 20	237	81.6	71.2	114.6	10	11.6	1.08
(対照) ミホコール	2000. 12. 1	275	89.0	70.0	127.1	7.6	10.6	0.88
	2001. 12. 20	147	71.4	53.2	134.1	10	12.2	0.80
(対照) ありあけ	2000. 12. 1	153	68.3	66.8	102.2	9.4	10.4	0.85
	2001. 12. 20	211	75.3	75.3	100.0	10	12.3	0.81

^{X)} 調査日は、2000年12月1日、2001年12月20日

^{Y)} (横径/縦径)×100

^{Z)} 着色歩合は、数値が高いほど着色が進んでいることを示す (10は、完全着色)

表2 年内出荷用交雑品種「広島果研12号」の果実特性

品 種	色	粗滑	剥皮性	果汁の 多少	じょうのう膜 の硬さ	種子数 (個)
広島果研12号	濃橙	やや滑	中	多	中	0.5
(対照) ミホコール	赤橙	滑	やや難	多	硬	1.3
(対照) ありあけ	橙	中	やや易	中～多	中	0.3

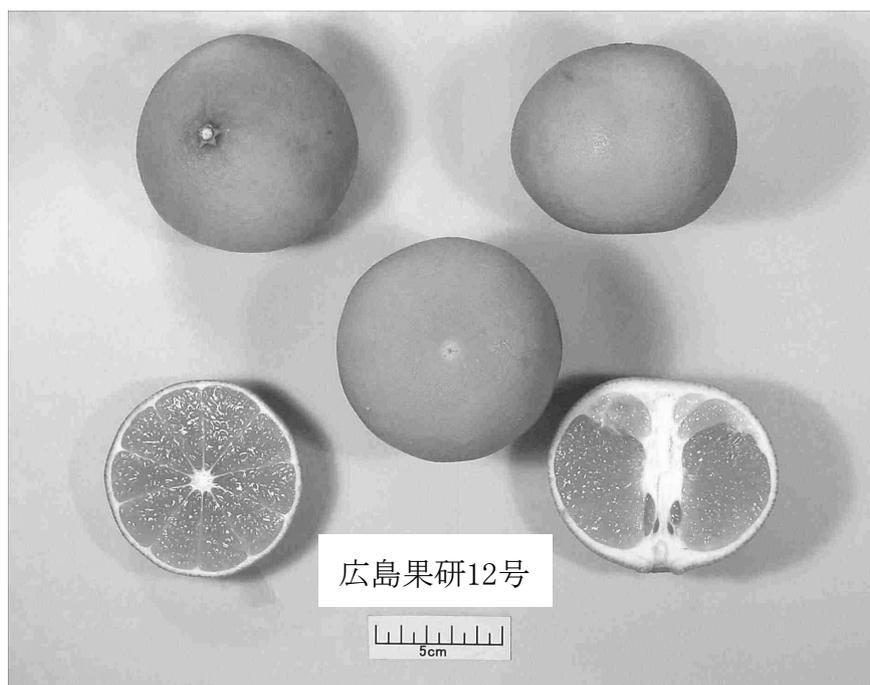


図1 「広島果研12号」の果実の形状